慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古代日本人の世界觀についての一考察
Sub Title	Notes on ancient Japanese view of life
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Katsujiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1949
Jtitle	史学 Vol.24, No.1 (1949. 10) ,p.72- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19491000-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古代日本人の世界觀についての一考察

淺子勝二郎

日本国家の成立の時期を適確に規定することは困難であるかも知れないが、わが日本民族は西紀五世紀頃までにはほぼ混成した一民族としての面目を具えるようになつたらしい。六世紀に入るや大陸の影響によつて文化活動が開始され、国家組織が次第に整備すると共に、わが民族の新生は藝術的活動として現わはれた。記紀はこの時代に編纂されたものであろう。それが今日見る如き内容を整えたのは、西紀五百年代即ち継体天皇の御代以後約百年間と推定して大過なきもののようである。そこで古代日本民族の精神生活を考察しようとするならば、記紀の内容に多くの材料を求めなければならないのは言うまでもないが、それについて純粋な日本思想と外来思想を辨別することは容易な業ではない。これに反して万葉集においては、記紀の如くある目的の為に故に人工を加えて編纂されたものでないだけに、比較的純粋な民族精神の表現を看取することができる。この意味において万葉集は、精神史的考察の資料としては記紀よりも高い価値を有するともいえよう。

以下万葉集を中心として「當世」の思想の発達――主として支那の神仙思想の影響の下になされたと考えられる――について考察し、併せてわが古代日本民族の精神活動の一端に触れてみようと思う。

一

凡そ文化の受容交流は(一)受動性と自発性の交錯に成立する。

内容を異にする文化は、自らの精神の発展として直ちに受容される場合と、民族精神の相違からその儘では受容し難い場合がある。文化の受容といつても、実は選択的受容或は無意識の転釈である場合が多いのである。

万葉集巻五に次の歌がある

我が盛いたく降ちぬ雲に飛ぶ
薬はむとも又変若めやも

これは、晉葛洪神仙伝巻四に「時人伝、八公安臨去時

余藥器置在中 庭鷄犬甜啄尽得昇天故鷄鳴天上犬吠雲中也」とある淮南王劉安の故事に係るものであるが、当時既に不老長生の仙薬の知識を伝承していたことを物語つている。

同巻五に、吉田連宜の松浦仙媛に和する歌として

君を待つ松浦の浦の仙媛等は常世の國の天少女かも

とあるが、これは松浦佐用姫を仙媛といつたので、これも当時既に仙女とか常世という観念があつたことを示している。

松浦仙女については、同巻五に更に数首ある。

松浦河河の瀬光り年魚釣ると立たせる妹が裳の裾ぬれぬ

松浦河河の瀬早み紅の裳のすそ沾れて年魚か釣るらむ

この松浦河に魚を釣る女子の伝説は、神功紀に

夏四月壬申朔甲辰、北のかた火前國松浦縣に到りて、玉島里の小河の側に進食す。是に皇后針を勾げて鉤を為り、粒を取りて餌にし、裳の縷を抽取りて緡にして、河中の石の上に登りて、鉤を投げて祈ひて曰く、朕西のかた財の國を求めむと欲す。若し事を成すこと有らば、河の魚飲鉤へ。因りて以て竿を挙げて乃ち細鱗魚を獲つ。時に皇后曰く、希見しき物なりと。故に時人其の処を号けて梅豆羅國と曰ふ。今松浦と謂ふは訛れるなり。是を以て其の國の女人、四月の上旬に当る毎に、鉤を以て河中に投げ年魚を捕ふること今に絶えず。唯男夫釣ると雖も、以て魚を獲ること能はず

とあるように、元來神仙思想を伴うものではないのであるが、雄略紀(二)では、浦島が行つたという海底の世界蓬莱山を「とこよのくに」と訓ましている(これについては後で触れるが蓬莱山と「とこよのくに」とは本来同じものではない)ことから推して、松浦仙女の観念は、神仙思想の影響によつて後人の心に結ばれたものと考えられるのである。

さて、雄略紀には浦島が蓬莱山(とこよのくに)へ行つたことを伝えているが、所謂浦島伝説が当時既に広く伝承されていたらしいことは、これが單に雄略紀のみならず、万葉集(巻九)丹後國風土記(釈日本紀巻十二所引)等にも見えていることによつても知られるのである。そしてそれらは各々その表現を異にしているのであるが、むしろその相違点を一々比較考察することによつて、我々は該伝説発生の心理的根拠その発達の過程等を明かにすることができるのである。

そこで万葉集(三)と風土記(四)の記載(それぞれの作者とされている高橋連虫麻呂の伊預部馬養連は大体同時代の人であるから、一時代に両者が並び行われていたものとみなければならない)を一に比較してみよう。

まず浦島が邂逅する小女は、前者においては海神の

女、後者においては蓬萊の仙女である。彼はその案内で海底の宮殿へ行き歡を尽すのであるが、偶々故郷を懐しみ帰郷する、そこで彼ははじめて非常なる時の経過を知り、奇異の念にかられて、小女からの贈物の箱をあける。ここまではとにかく両者共通であるが、結局万葉集においては浦島は違約によつて忽ち老いさらばい落命し、風土記においては、違約に際して仙女の贈物の箱から白雲が飛散し、浦島が遙か空中の神女と唱和することになつている。

要するに万葉集の浦島伝説には、無常なる人間世界の外に、超人間的な永遠なる世界を夢想しているわが古代人の意識が極めて自然にあらわれているに反し、風土記のそれは、同じく永遠なる世界への憧憬を物語つているとしても、例えば小女が天上仙家の人なるにかかわらず、その棲処が海中の島であつたり、或はその仙女が海に入つて龜となる等、その表現に一見不自然な点を認めるのである。

ここで風土記の浦島伝説を分析すれば、一方万葉集のそれと軌を一にする部分と他方支那の神仙譚と相通ずる部分に分けることができるが、それは本來の浦島伝説に支那の神仙譚の影響が加わつたものではなかろうか。そして本來の浦島伝説は、その最も純粋なる表現を万葉集の長歌において見ることができるではなかろうか。

さて浦島伝説は古代日本人の想像活動の所産であるとしても、それが伝承される中に次第に他の伝説と混合してその表現を異にし、風土記の伝説の如く支那の神仙譚(五)がその主要素となるまでに著しい影響を與えている場合もあるのである。しかもその伝説の混合の際のわが日本民族の精神活動には、その進路に自ら特殊の発展—現実主義的傾向を満足させる方向への—があり、そしてそこに我々は民族性の一面を窺うことができるのである。

二

渡來当初における仏教受容の仕方については(六)、その思想的理解は甚だ浅薄で、仏はただ現世利益のための礼拜の対象たるにすぎなかつた。結局仏教は祈禱教以上の意味をもたなかつたというのが従來の一般的見解である。蓋しわが古代人が仏教の深遠なる哲学思想を理解し得なかつたのは当然であろう。たしかに彼等は仏像を礼拜して現世の利益幸福を祈つたに違いない、しかしそれは仏教の本來的な理解には至らなかつたまでのことで、それが日本人の側における独特な精神発展の一段階であつたことは容認せられなければならないと思う。

さて仏教は渡來早くも、聖徳太子の三経義疏にみられ

るような深い思想的理解を得られた場合もあるが、一般的には伝統的な民族精神に基いて日本独特の仕方で行われた　うである。

高山岩男氏によれば(八)、それは直観的な受容の仕方鎮護國家的な受容の仕方現実主義的な受容の仕方の三つである。

わが古代人は、理論を通して仏教の眞理に到達するよりも、仏像や法会を通してむしろ直覚的に仏の荘厳な世界に接触しようとした。ここにも主情的感覚的直截的な日本民族の性格をみることができる。

仏教は元來個人的な宗教であるが、彼等はこれを鎮護國家的なものとして受容した。この仏教の日本的転釈は、所謂護國の三経典（金光明最勝王経　法華経　仁王経）の選択的受容にも認められる。

現実主義的なわが民族性は仏教を現世的宗教として受容させた。小乘、大乘の諸仏教中特に大乘仏教を取り入れ、これを発展させた根柢には、この現実主義的精神が働いていると共に、この精神は大乘仏教によつて練えられ深められて行くのである。

さて渡來当初における仏教の受容の仕方について従來の一般的見解は「仏教はただ利益・幸福を祈る現在教にすぎなかつた」というので、これは一應尤もであるが、我々は更に進んで然らば逆に現世の不幸はわが古代人にとつて何を意味したであろうかを考察しなければならない。

思うに彼等は、現世生活を享楽する(九)外他を顧る暇がなかつたのであろう。確かに彼等は享楽に対して新鮮な感受性をもつていた。もつていたればこそ、その享楽が失われる悲哀に対しても亦同様だつたのであろう。その悲哀の原因が主として病気と死であることはいうまでもない。特に死は、死者の枕辺足辺を匍匐して慟哭し(十)、またその声が天上にまで響き行くほど(十一)悲しいものであつた。

結局わが古代人は、現世の不幸の根拠を現実の人生の不完全に求めたのであるが、現世否定の傾向をもたなかつた彼等が、完全なものとして憧憬するのは、この現世からこの不完全を取り除いた常世の國である。老もなく死もなき國である。それを彼等は、現世の一角に――遠く海原の彼方に、海原によつてではあるが、地理的に彼等の國土と結ばれているところに――夢想したのである。即ち彼等は、人生を無常と観じて然る後に彼岸の不死を願うのではなく、歡喜に満てる現世の延長としての永世を求めるのである。

さて前述の如く万葉集の浦島伝説には無常なる人間世界の外に超人間的な永遠なる世界を夢想しているわが古代人の意識が、極めて自然に表現されているのである

が、あの死の悲哀の中にこそこの憧憬の心は力強く動いていたのである。

死はいつ彼等に忍び寄つてこないとも限らない、古代人のこの不安な・頼りない心にとつて、宗教はその支えとして必要欠くべからざるものであつた。

書紀は仏教の渡來に際し、天皇がその微妙の法を聞いて歡喜踊躍し、未だ曾て見たことのない端嚴な仏の相貌に感動せられたことを伝えているが、人間の姿をした美しい・神々しい・意味深い仏はわが古代人の心を大きく震り動かしたに相違ない。

人或は当時盛に行われた寺院の造営仏像の造顕を以て仏教の理解を云々するも、寺院の造営は必ずしも仏教の眞の理解とは平行しない。仏像は一種の神秘的尊嚴を以て彼等の宗教心を刺戟したであろうが、この場合より多く働いたのはむしろ彼等の美意識ではなかつたろうか、言い得べくんば、彼等は美の意識活動によつて即ち芸術を通してわずづに宗教的体験に触れたのではなかつたろうか。

彼岸は古代人にとつて解脱の世界ではなく死後の世界である。死後にこそ眞実の生活がある、そしてこの眞実の生活を人間的な姿の仏が保証する——という信仰によつて彼等は死の悲哀を慰められたのである。天壽國曼荼羅粛帳にいう「世間虚仮、唯仏是眞」或は淨土における聖德太子往生の状の空想の如きは、この慰めを投影しているものであろう。法隆寺建築同金堂壁画の阿彌陀仏夢殿観音百済観音中宮寺観音等の諸仏像も彼等の創作として理解されるのではなかろうか。これらこそはあの悲哀と憧憬の結晶ではなかろうか。

三

仏教の渡來によつて古代日本人は、不完全なる現実の人生或は無常なる現実の人生に対して、完全なる、或は永遠なる仏の世界を、又この仏の世界に関連して死後の淨土の存在を学んだ。永遠との関連において現実の人生がみられるに至つたということは、仏教の渡來に基く國民思想の著しい変動であつた。

さて彼等は如何なる意味において現実の人生を無常と観じたのであるか、又無常なる現実の人生に対立するものはただ仏の世界にのみ限られているのであろうかということについては既に一應触れるところがあつたのであるが、この無常観は少くとも二つの性質を異にする内容をもち得る、即ち一は不完全な現実の人生に対する悲哀だけではなしに、無常なる人生そのものに対する価値批判を伴う場合で、これは人生そのものの本頼を否定する

という形をとつてくるのであるが、他は人生そのものの本質を否定するには至らざるも、ただそれが永遠なるものではないという現実の事実に対して限りなき悲哀を感ずるという場合である。第一の場合、仏教は彼岸の世界を教えたが、第二の場合は必ずしもその儘では彼岸の世界と結合すべきものではない。否これとは全くその性質を異にする永遠の世界を予想することもできるのである。ところでわが古代思想にあつては、現実の人生をその本質において否定するという傾何はほとんどみることができない。わが古代人は現世を否定せずして、しかもより高き完全なる世界を心に画いたのである。もし彼岸の世界を得ることが現実の人生を否定することを前提とするものであるならば、このことは彼等にとつて極めて困難であつたに相違ないが、幸い浄土はこの意味において彼等を満足せしめる一面をもつていたのである。聖徳太子が往生されたという天壽國なる浄土の存在はこれを物語るものであろう。

さて人間に避け難い死、それは死者の枕辺足辺を匍匐して慟哭し、またその声が天上にまでも響き行くほど悲しいものであつた。不老不死の永遠の世界が、憧憬の対象として如何に強く彼等の心に求められていたかは蓋し想像に難くないと思う。常世國思想[十三]はかかる背景をもつて発達してくるのである。

常世なる語は、既に記紀の神代卷に見ることができる。即ち古事記には、少名毘古那神が大國主神と共に國作りを行つた後、常世國に渡られたとあり、又鵜葺草葺不合命の御子御毛沼命も「波の穂を跳みて常世國に渡り坐」したとあり、書紀には垂仁天皇九十九年の條に、田道間守が常世國から非時香菓を持ち帰つたとある等古くから行われていた言葉であることが知られるのである。従つてこれについては色々な解釈が行われているのであるが、本居宣長[十四]は、「凡て上ツ代に常世と云に三ツあり」として、それには三通りの意味のあることを指摘している。第一は常世長鳴鳥・常世思兼神というが如き場合であつて、これは常世の意味である。天照大神の石戸隠れに伴つて「高天原皆暗く、葦原中國悉に闇し。此に因つて常夜往く」云々とあるのは、この解釈に一つの根拠を與えるものである。第二は古事記の雄略天皇の御歌に「呉床座のかみのみてもちひく琴に舞するをみな常世にもかも」とある常世、また書紀垂仁天皇二十五年の條に「是れ神風の伊勢國は、則ち常世の浪の重浪帰する國なり」云々とある天照大神の御言葉の如き場合であつて、これは常とはにして変らぬ意味に解釈される。第三は常世國であつて、これは必ずしも時間的に永遠なる世界を意味

するものではなく、これには天之常立・國之常立の場合と同様の解釈が適用される。即ち天之常立・國之常立はまた天之底立・國之底立であつて、底は深さにおいてのみ使用される言葉ではなく、凡て「底とは上にまれ下にまれ横にまれ、至り極まる処を、何方にても云り」とあつて広さにおいても遠き極みの意味に使用される。換言すれば常世國とは「如此名けたる國の一ッあるには非。ただ何方にまれ、此皇國を遥に隔り離れて、たやすく往還がたき処を泛く云名なり。故名義は、底依國にて、ただ絶遠き國なるよしなり」で、或る特定の世界を意味するものではなく、底依國であつてただ遠く隔絶した國を意味するものに他ならないのである。

兎に角宣長は常世なる語について以上三通りの解釈を下しているのである。この解釈が混同されることによつて、常世國は暗黒の世界ともなり永遠の世界ともなり得るのであるが、それは前述の如く本來かくの如き性質を伴うものではなく、ただ遠く海原の彼方に存在するものと想像され、海原によつてではあるが地理的に彼等の國土と結ばれている、死後の世界でもなければ理想の世界でもなく、要するに現実の世界の一部をなすものに他ならなかつたのであるが、それが容易に渡り着くことのできない國であるというところに空想が働き、その性質が変化する可能性があるのである。田道間守の言葉によれば「命を天朝に受けたまわりて、遠く絶域に往き、万里浪を蹈みて遥に弱水(よはのみ)を渡る。是の常世國は、即ち神仙の秘区、俗の臻らむ所に非ず。是を以て往來の間に自ら十年に経りぬ。豈期ひきや、独り峻瀾を凌ぎて、更た本土に向むということを。然るに聖帝の神霊に頼りて、僅に還り來ることを得たり」というわけで、神霊の加護なき限り帰り來ることができないという意味で、常世國はまた死の世界とその観念において結合することもできるのである。少くとも波の穂を跳んで常世國に渡られた御毛沼命或は少名毘古那神は所謂不帰の客となつたわけであり、この意味における常世國の発展もたしかに見られるのであるが、田道間守によればそれはまた神仙の秘区であつて、俗人の渡り得るところではないのである。

さて常世國は死の世界ともなり神仙の秘区ともなつたのであるが、常陸國風土記(岩波文庫本四七頁)には

それ常陸の國は、堺は広大に、地も緬邈なり。土壌沃墳に、原野肥衍たり。墾発の処、山海の利、人々自得に、家々足饒へり。設し、身を耕耘に労き、力を紡蚕に竭す者あらば、立即に富豊を取るべく、自然に貧窮を免るべし。況はめや復、塩と魚との味を求はば、左は山にして右は海なり、桑を植ゑ麻を種ゑむには、後

は野にして前は原なり。いはゆる水陸の府藏、物産の膏腴といへるものなり。古の人の常世の國といふは蓋し疑はくは此の地ならむか。但、あらゆる水田、上は少く、中は多きを以ちて、年々霖雨に遇はば、やがて苗子の登らざる難を開き、歳々亢陽に逢はば、唯穀実豊稔なる歡を見む。

とあつて、それが更に現実の楽土に発展したことを示しているのである。

ところでこの後常世國は彦火出火火出見尊の行かれたといふ海底の世界海神國と混同されているのである――尊が老翁の計らいで無目籠に乗つて海に沈むと忽ち海神宮に至るのであるが、古事記では海神國が海底にあるものかどうか明かでない――結局この二つの世界は、浦島伝説において結合されるに至るのである。しかもこの伝説においては、常世國を神仙の秘区とする思想が見られるのである。

「海神の神の女に邂にい桧ぎ向ひあひとぶらひこと成りしかばかき結び常世に至り海若の神の宮の内の重の妙なる殿に携はり二人入り居て老もせず死もせずして永き世に在りけるものを云々」というわけで、この浦島伝説も書紀においては、まだ完全な形になつていないが、万葉集の長歌及び丹後國風土記特に前者はこの伝説を窺うべき最も貴重な資料である。

書紀においては、前に触れたやうに常世國は明に不老不死の世界蓬莱山であるが、これは既に田道間守の言葉として神仙の秘区とされた常世國が、ここに発展したものと見て差し支へなく、万葉集においては常世國は明かに海神國と結合し、更にこれに不老不死の神仙郷としての性質が加へられているのである。

とにかく浦島伝説の発達に伴つて構成された常世國の概念には、宣長が常世について與へた第二の意味即ち常とはにして変らぬ永遠の意味が重要な要素として取り入れられてをり、不老不死の神仙郷としての性質がその概念に加へられたことは、明かに支那の神仙思想の影響と認められる。この神仙の世界は、宗教としてよりはむしろ憧憬の対象として彼等に取り入れられ、これが常世國と結合して浦島伝説が発達してきたのである。

要するに無常なる現実の人生に対して永遠なる仏の世界を教へられたわが古代人は、日本人の側においてかくの如き形の常世國を構成したのである。（二四・七・一）

註

（一）高山岩男氏「文化類型学」一九八―一九九頁

（二）岩波文庫本二四一頁

廿二年秋七月丹波国餘社郡管川の人水江浦島子、船に

乗りて釣す。遂に大龜を得たり。便ち女に化為る。是に浦島子感りて以て婦と為し、相逐ひて海に入りぬ。蓬萊山に到りて仙衆を歴観る。

（三）岩波文庫本三五四―三五五頁

春の日の　霞める時に　住吉の　岸に出で居て　釣船の　とをらふ見れば　古の　事ぞ念ほゆる　水江の浦島兒が堅魚釣り　鯛釣り矜り　七日まで　家にも出ずて　海界を　過ぎて榜ぎ行くに　海若の神の女に邂にい榜ぎ向ひ　あひとぶらひ　こと成りしかば　かき結び　常世に至り　海若の神の宮の　内の重の妙なる殿に　携はり　二人入り居て　老もせず　死もせずして永き世に　在りけるものを世のなかの　愚人の吾妹子に　告りて語らく　須臾は　家に帰りて　父母に事も告らに　明日の如　吾は来なむと　言ひければ妹がいへらく　常世辺に　また帰り来て　今のごと逢はむとならば　この篋　開くな努と　許多に　堅めし言を　住吉に　還り来りて　家見れど　家も見かねて　里見れど　里も見かねて　怪しと　そこに念はく家ゆ出でて　三歳の間に　墻も無く　家滅せめやと

この筥を　開きて見てば　旧の如　家はあらむと玉篋少し開くに　白雲の　箱より出でて　常世方に棚引きぬれば　立ち走り　叫び袖振り　反側び　足ずりしつつ　たちまちに　情消失せぬ　若かりし　膚も皺みぬ　黒かりし　髪も白けぬ　ゆなゆなは　気さへ絶えて　後つひに　壽死にける　水江の　浦島子が家地見ゆ

（四）岩波文庫本二九七―三〇三頁

浦島子

丹後国風土記に曰く、與謝の郡、日置の里、この里に筒川の村　あり。こゝの人夫日下部首等が先祖は、名を筒川の嶼子といひき。人となり姿容秀美しく風流なること類なかりき。こはいばゆる水江の浦の嶼子といふ者なり。これ旧宰伊預部馬養連が記せるに相乗くことなし。故、略そ所由之旨を陳べむ。長谷の朝倉の宮に天の下知らしめしし天皇の御世、嶼子独り小船に乗りて、海中に汎び出で、釣すること三日三夜を経て、一の魚だに得ず、すなはち五色の龜を得たり。心に奇異しと思ひて船の中に置きて、やがて寢ねつるに、忽ちに婦人と為りき。その容美麗しく、更比ぶべきものなかりき。嶼子、問ひしく、「人宅遥遠にして、海庭に人なし、詎人の忽ちに来たれるぞ」と云ひき。女娘微笑みて対へけらく、「風流之士独り蒼海に汎べり、近しく談らむとするこころに勝へず、就風雲来つ」といひき。嶼子、復問ひしく、「何処よりか来つる」といひければ、女娘答へけらく、「天上仙家の人なり。請はくは君な疑ひそ。相談ひて愛み給へ」といひき。ここに嶼子、神女なることを知りて、懼れ疑ふ心を鎮めき。女娘語ひしく、賤妾が意は、天地と畢へ日月と極らむと　おもふを、但、

君奈何にかする、許不の意を早先にせむことを」といひき。嶼子答へけらく、「更に言ふところなし。何をか解らむやといひき。女娘、君、宜棹を廻らして蓬山に赴きまさね」といふ。嶼子従ひて住かむとしき。女娘、目を眠らしむ。すなはち意はざる間に、海中の博大き嶋に至りき。その地は玉を敷けるが如く、闕台は晻映しく、楼堂は玲瓏き、目に見ざりし所、耳に聞かざりし所なり。手を携へて徐に行き、一つの大きなる宅の門に到りき。女娘、「君しばし此処に立ち給へ」といひて、門を開きて内に入りき。やがて七の竪子来たりて相語らひけらく、「こは龜比売の夫なり」といひき。亦八の竪子来たりて相語らひけらく「こは龜比売の夫なり」といひき。ここに、女娘の名は龜比売なることを知りき。すなはち女娘出で来たりしとき、嶼子、竪子等の事を語りき。女娘、「その七の竪子は昴星なり。その八の竪子は畢星なり。君な怪しみそ」ととひて、すなはち前に立ちて引導き、内に進み入りき。女娘の父母、共に相迎へ揖みて坐を定めき。ここに人間と仙都との別を称説き、人と神と偶に会へる嘉き談議り、すなはち百品の芳しき味を薦め、兄弟姉妹等は杯を挙げて献酬し、隣の里の幼女等は紅顔にして戯れ接り、仙歌は寥亮に神舞は逶施に、その歓宴を為すこと人間に萬倍れり。ここに日の暮るることを知らず、但、黄昏の時に群仙侶等、漸々に退き散け、すなはち女娘独り留り、雙の眉袖に接りて夫婦の理を成しき。時に嶼子、旧俗を遺れて仙都に遊ぶこと既に三歳を経たり。忽ちに土を懐ふ心を起し、独り親を恋ふ。故、吟哀繁く発り、嗟嘆日に益りき。女娘問ひしく、「比来君夫が貌を観るに、常の時に異なり。願はくはその志を聞かむ」といひき。嶼子対へけらく、「古の人、小人は土を懐ひ、死孤は丘を首にすと言ひき。僕、虚談なりといひしに、今これ信にしかなり」といひき。女娘問ひて、「君帰らむと欲すか」といひき。嶼子答へけらく、「僕、近く親故之俗を離れて遠く神仙之堺に入り、恋ひ眷ぶに忍へず、すなはち軽しき慮を申べつ。願はくは、暫し本俗に還りて、二親を拝みまつらむことを」といひき。女娘、族を拭ひて歎きけらく、「意は金石と等しく共に万歳を期りしに、何ぞ郷里を眷ひて、一時に棄て遺るる」といひて、すなはち相携へて徘徊に、相談ひて慟哀しみ、遂に袂を接へて退き去り、岐路に就きき。ここに女娘の父母と親族と、但に悲しみて副ひ送りき。女娘、玉匣を取りて嶼子に授けて謂ひしく、「君、終に賤妾を遺れずして眷み尋ねむとならば、堅く匣を握り、慎みて開き見給ひそ」といひき。すなはち相分れて船に乗り、よりて目を眠らしめき。忽ちに本土筒川の郷に到り、すなはち材邑を胆眺むるに、人と物と遷ひ易り、さらに由る所なかりき。こゝに、郷人に問ひしく、「水江の浦の嶼子が家の人は、今、何処にか在る」

といひき。郷人答へけらく、「君は何処の人なれば、旧遠の人を問ふぞ。吾、古老達の相伝を聞くに、先の世に水江の浦の嶼子といふものあり。独り蒼海に遊びて復還り来らず。今にして三百余歳を経つといへり。何ぞ忽ちにこれを問へるといひき。すなはち棄てし心を蹴みて郷里を廻りしかども、一の親しきものにも会はず、はやく旬月を逕しき、すなはち玉匣を撫でて神女を感思ひき。ここに嶼子、前の日の期を忘れて忽ちに玉匣を開きつ。未胆之間に芳しき蘭のごとき体、風と雲とに率いて蒼天に翩り飛びき。嶼子、すなはち期要に乖違きて、還りても復会ひ難きことを知り、首を廻らして踟蹰まひ、涙に咽びて徘徊りき。ここに涙を拭ひて歌ひしく、

常世辺に　雲立ち渡る
水の江の　浦島の子が
言持ち渡る

神女　遥に芳音を飛はして歌ひしく、

大和辺に　風吹き上げて
雲離れ　退き居りともよ
吾を忘らすな

嶼子、更恋望に勝へずして歌ひしく、

娘等に恋ひ
朝戸を開き　吾が居れば
常世の浜の　波の音聞ゆ

後時の人追び加へて歌ひけらく、

水の江の　浦島の子が
玉匣　開けずありせば
又も会はましを」
常世辺に　雲立ち渡る
絶ゆ間なく　言ひは継がめど
我ぞ悲しき

（五）黒板勝美氏「我が上代に於ける道家思想及び道教について」（「史林」八ノ一）参照

（六）和辻哲郎氏「推古時代に於ける佛教受容の仕方について」（「日本精神史研究」三七―四九頁）

（七）津田左右吉氏によれば、三経義疏述作の御事業も十七條憲法の御制定も、後世律令の制定・国史の編纂等の企図せられつゝあつた時代に太子に仮託されたものであるといふ（氏は憲法制定説話・三経義疏述作譚等の語を使用される）「日本上代史研究」一八〇―一八九頁「上代日本の社会及び思想」四五二―四五九頁

（八）佛教の渡来と受容（「文化類型学」二〇三―二一〇頁）

（九）この肯定的な心性は、神代神話において「高天原皆暗く、葦原中国悉に闇し」といふ非常時に際しても、「天宇受売は、樂びし、亦八百萬神諸咲ふ」といふ余裕

となつてあらはれる。この点は萬葉時代に入つても同様で小野老・山部赤人等の歌は、彼等も亦無條件で生を肯定したことを物語つてゐる。

あをによし寧楽の京師は咲く花の薫ふがごとく今さかりなり（巻三）

春の野に董採みにと来し吾ぞ野をなつかしみ一夜宿にける（巻八）

（十）古事記（岩波文庫本）二五頁

故爾に伊邪那岐命の詔りたまはく、愛しき我が那邇妹命や。子の一木に易へつる乎と謂りたまひて、即枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐ひて、哭きたまふ時に云々

（十一）古事記五六頁

故天若日子が妻下照比売の哭かせる声、風の與響きて、天に到りき。

（十二）佛教が我が国に伝来したのは、普通考へられてゐるよりも遥に古く、従つて欽明朝の頃には理解も相当深かつたといふ見解もある。

松本解雄氏「佛教の伝来と其の受容」（「史林」二五ノ三）

（十三）竹岡勝也氏「常世国思想の発達」（「史苑」二ノ一）

（十四）古事記伝十二（岩波文庫本一九七—二〇二頁）

「史　學」

東亜文明の始源　（通巻第九〇号）　定価　八〇円

古代日本研究　（通巻第九一号）　定価　一二〇円

ザビエル研究　（通巻第九二号）　定価　一五〇円

残本がまだ少しありますから、バック・ナンバアをぜひお揃へください。

（送料　各一冊　八円）

三田史学会